

令和4年度 能美市立福岡小学校 学校評価最終評価

重点目標 (めざす姿)	重点目標及び具体的方策	後期の取組状況	評価	最終	今後の改善策 (いつ・誰が・何を・どんなふうに・ねらう子どもの姿)	学校運営協議会による評価・感想 (CSの会にて)
1 組織的な 学校運営	①<安全・安心で楽しい学校づくり> 児童が安心して明るく元気に学校生活を送れるよう、物心両面における安全管理と危機管理に努め、いじめ・不登校・人権・特別支援等の課題には、組織的に迅速・適切に対応する。	【児童③83%④94%②94%】【保護者①98.1%】【教職員②100%】 各担任は、児童の様子や自身の指導を振り返りながら学級経営の再構築を図ってきた。児童の小さな言動も見逃さないようにアンテナを高く持ち、様々な情報を職員会議や職員終礼で共有してきた。いじめに関しては、迅速に複数での組織的な対応を行い、短期・長期的な見守りをしてきた。また、特別支援においては講師を招いて研修を実施することができ、保護者や専門機関と連携した個別の対応も行うことができた。	B	A	保護者の「お子さんは楽しく学校に行っている」と、児童の「みんなで何かをすることは楽しい」のアンケートにおいて、肯定的な回答の割合が高い。また、「先生はよいところを認めてくれている」の割合が上昇し、特に「A」と回答した割合が20%増えたことから、日頃から一人ひとりの児童を大切に声かけ等の対応をしてきたことが伺える。児童の自己肯定感の上昇も見られ、定期的な児童理解や支援会議等を随時行い、今後もこれらと併せて、全職員で児童に寄り添っていく態勢を継続していく。	・新型コロナウイルス感染症のため、制限のある中、学校で楽しく感じることがあるのは、とても良いことである。 ・新型コロナウイルス感染症が続いている影響により、子どもたちの姿が変化したように思われる。
	②<主体的・協働的な学校づくり> 学校運営の状況や課題及び学力の傾向や課題について、全職員が共有し、組織的・計画的に取り組むと同時に、教職員のキャリアアップを図る。	【教職員①83%】 教育活動の運営については、運営委員会での協議・確認をもとに、各分掌部会が様々な取組を練り上げ、連携しながら組織的に取り組んできた。学力向上ロードマップや学力向上プランの共有も定期的に行い、計画的に実践を行った。また、GIGA研修や他校での研修会への参加、その後の校内報告研修、若手中心のプロセスアシスト研修の要請など、機会をとらえ、教職員のキャリアアップに努めた。	B	B	全職員の良好な人間関係により、学校における様々な取組や活動など、いつも協働的に行われている。課題については、すぐに対応策を話し合い、実践している。が、各種ロードマップの取組について組織的・計画的な実践、検証、改善について「やや当てはまる」との回答が多く、検証・改善に関して十分とは言えないのではないかと感じている。また、GIGAスクール構想において、授業でのICTの効果的活用、学力向上など、積極的に取り組んでいるが、長期的な課題である。今後も継続して、計画的に組織的に実践を行い、協働的な学校づくりに努める。	・アンケートの結果から、子どもはほめられればほめるほど伸びるということがわかる。これからもほめて伸ばしていけることよい。
	③<業務改善> 教職員が常に時間管理や環境整備、ワークライフバランスの意識を保持し、ICTの活用やSSS、専門スタッフとの協働を効果的に進めながら、業務のスムーズ化を図る。	【教職員②100%】 1学期と同様に、行事のふりかえり、連絡事項、アンケートなどは、短時間で効率的に実施できるようクロムブックを利用したり、教材やクロムブックの活用についての職員間での交流をしたり、授業研究の充実につながった。また、SSSや支援員との業務の分担を行い、担任業務のスムーズ化や効率化を進めることができた。コモン利用により、朝の電話対応が減り、朝の準備や来客など別の対応ができるようになった。	A	A	クロムブックを活用した情報の共有について、便利などもあるが、全員への周知や共通理解については、今後の各個人の確認の習慣化の徹底が必要だと思われる。ますます、ICT機器の利用が増えつつあり、環境の整備・利用への研修などにも取り組む。業務改善における専門スタッフとの業務の分担や支援は、今後も継続して行い、全職員の協働的な態勢で、「学校力」として教職員全員で業務に当たるようにする。	・学校が目指す児童の姿を鑑み、多種多様な時代の中で、これからは、自分で考えて選ぶ時代である。子どもたちは自己肯定感をあげ、自分で選んで、考える力をつけていってほしいと考えている。
2 知(確かな 学力の 育成)	①<学力向上と授業改善> 授業改善に向けた研修(OJTを含む)を充実させる。また、自校の学力の傾向と課題とその改善策を共有し、「学力向上プラン」及び「学力向上ロードマップ」の確実な実施を行う。	【教職員④100%】【能美市④100%】 2学期は、学力調査の分析と改善策を研修会で共有し、各学年の国語と算数において授業改善を目的とした重点単元を設定・実践した。成果としてそれぞれ単元目標の意識した授業を行うことができた。課題としては、検証問題の達成率が6割程度であったので、その問題の内容も含め、授業でついた力が生かせるよう工夫が必要である。	A	A	12月に5年生を対象に行った県評価問題を分析し、課題と改善策を考え、3学期の学力向上プランとロードマップとして作成、研修会で全体共有と確認を行った。そしてそれをもとに、3学期も国語と算数において、授業改善を目的とした重点単元を設定し、実施、検証していく。検証問題についても、授業でついた力が実感できるような問題を吟味して行う。	・GIGAスクール構想については、今の社会において必要かもしれないが、これからの教育とのバランスが重要だと考えている。クロムブックに集中しているといふ話が多いが、声をかけるとかえらるということもあるので、使い方は重要だと感じた。
	②<基礎基本と活用力の育成> 「きらめきシステム」等を充実させ、基礎的知識・技能の定着及び活用力を育成する。	【漢字・計算・検証問題の結果76%】【保護者③79.3%】 きらめきシステムを基に、朝学習では級外が支援に入ったり、放課後の補充学習を取り入れたりと、組織的に基礎基本、活用力の向上に努めることができた。テスト結果としては、昨年の2学期と比べ、漢字の達成率が63%→68%、計算は87%→83%と、課題となっていた漢字の定着は少しずつ改善されてきた。漢字・計算の両方についての定着が課題となる。家庭学習の習慣としては、保護者アンケートの結果は3%上がっているが、2学期の家庭学習強化週間の目標学習時間の達成率が87%→81%と減少している。	C	C	「使える漢字の定着」のため、新出漢字について、漢字ドリルの例文や教科書で使われている文章を読み、その漢字の使い方になれる。また漢字の小テストは、熟語のみではなく、文章中の漢字を書くものにする。また、クロムブックのAIドリルで漢字の習熟を図る。(担任は定期的にその進捗状況を確認する。)そして、家庭学習として、漢字と計算の繰り返し練習や自学ノートの習慣化により質と量の充実を図る。家庭学習については、3学期も家庭学習・生活見直し週間を継続し、定着を図る。	・漢字の学習について、PCなどの利用が多くなると忘れていくことを実感する。書くことも必要、クロムブックは場面を選んで、両方ともうまく使えることではないか。
	③<学ぶ喜びと達成感のある授業づくり> 算数科において、考えをつなぎ、広げ、深め合う場面の数学的活動を充実させる。学びの自覚化につながる振り返りを充実させる。	【児童④82%⑥86%】【教職員⑤92%】 ⑥83→86 「授業でまとめた振り返り振り返りして考えが深まっている」④73→82 「授業で図・言葉を使って表現している」上記の項目が⑥は3%、④に関しては9%向上した。担任全員が公開授業を行った。その際、児童がどんな言葉で何を表現できれば良いのかというゴールの姿を明確にし、そのためにどんな支援をすれば良いのかを考えた上で授業を行ったことが児童の表現できたという自己肯定感の向上につながった。また、教師が意図的に算数用語を使い、またそれを児童が使った表現したときにはすかさず認めクラス内に浸透させたことも有効だった。	B	B	図・式・言葉で表現できた自己評価している児童が増えたが、一方で表現することが困難な児童もいる。すべての児童が学びを積み上げ、自分の成長を感じられるよう、最後のゴールに向かってスモールステップで、自己評価していける取組ができると良い。 1学期:自分で考えを持つことができなくても友達の考えや教科書の考えを参考に書くことはできた。 2学期:表現はまともにならなくても、自分で考えたことを図・式・言葉で表現することはできた。 3学期:相手に伝わるように、図・式・言葉で表現することができた。	・自分の考えを表現することが苦手であることは、以前からも課題になっていた。また、中学校でも同様の様子が見られ、根上地区全体で、考えてもよい。大きくなると、周りの目や恥ずかしさも気になるので、小学校で表現することがたくさん経験できるとよい。
	④<GIGAスクール構想の推進> GIGA校内研修推進リーダーを中心に、年間計画に沿った研修を行うことで、全教員が「児童が一人一台端末を活用して学ぶ授業」の実践力をつけ、児童の情報リテラシーを高める。	【児童⑤93%】【教職員⑦92%】 活用例や実践紹介、Google for education についての校内研修を行い、効果的な使い方について意見交換することができた。また、ICTサポーターに支援してもらいながら、1日2回以上授業の中でクロムブックを使うことを目標に活用の幅を広げた。高学年に限らず、低・中・高学年もクロムブックの使用に慣れてきており、各学年の児童の実態に合わせた活用が進むことで、ICTを活用した授業の良さを実感できている。	A	A	授業者は、効果的な活用ができるように、教材研究の際にICTを活用するのに適している時間を見定める。そして、週案に位置付けるなどして積極的にICTを活用する。また、職員終礼時の実践交流や他校の実践例の紹介など、校内研修を計画的に行い、活用場面を広げていく。来年度も情報モラル教育を行い、児童自身が端末の使い方を考え直すきっかけをつくる。学校全体で一貫したルールの上で、児童が自由に学ぶことができる環境づくりをすすめる。	・自己を表現することには、これからも継続して指導していくことに期待する。 ・クロムブックの利用が多くなってきて見えてきたよかったことや課題を教員と共有し、改善していけるとよいのではなかった。
3 徳(豊かな 心の 育成)	①<積極的な生徒指導> 魅力ある学校づくりの取組をしたり、QUの結果を効果的に活用したりする。	【別アンケート児童 93%】【教職員⑦100%】 【A児52%→68%、B児31%→25%、C児12%→6%、D児5%→1%】 魅力ある学校づくりの取組として「みんなで作る大作戦」を実施することで、児童のつながる・つながる主体性の育成につながった。児童たちは、高まっていく(集団)をカレンダーで確認することで、自己肯定感を高めたり主体性を向上させる意義を実感したりしていた。また、この生徒指導の取り組みが研究の土台の一部となり、連携できたことも成果である。	A	A	3学期の魅力ある学校づくりの取組のテーマは、「見せて！認める！大作戦」としている。文字や言葉などで相手に自分を見せて、それを見た側はそれを認めるという表現と受容の主体性である。すでに、2学期末に低・中・高学年に分かれて計画しており、1月中旬から下旬までの2週間に取り組む。1学期、2学期、そして3学期と様々な種類の主体性を児童に価値づけしてきた。今年度は見える主体性が中心であったが、来年度は見えにくい主体性にも取り組んでいきたいと考えている。	・いろいろな取組を通して、児童の「自分にはよいところがある」という自己肯定感が上昇したことは、とてもよかった。
	②<居心地のよい集団づくり> 生徒指導の3機能をいかした授業づくりを推進し、児童が主体的に取り組む、お互いを大切に協働性を高める実践を工夫することで、「より良い学級・学校を自分たちでつくる」という意識を高める。	【児童⑦91%⑨87%】【教職員⑥100%】 児童会が中心となり、あいさつ運動やあったか言葉に取り組むことができた。運動会などの行事でも児童の主体性や協働性を価値づけることができた。 魅力ある学校づくりの取組は居心地のよい集団作りにもつながっている。児童たちは、高まっていく自分(集団)をカレンダーで確認することで、自己肯定感を高めたり主体性を向上させる意義を実感したりしていた。	B	A	締めくくりにして、次の学年への準備段階であることを各担任が適宜指導していく。集団の自治力や学級力の高まりを、行事や授業を通して指導していく。特に、「送る会」や「卒業式」では、「明確な目的を共通理解し達成するために取り組むこと」に重点を置いた指導を全職員が行っていく。	・豊かな心の育成を目指して、様々な取組や活動をする中で友だちをはじめ、いろいろな人と関わりを通して、コミュニケーション力の感謝の心を身につけてほしいと願っている。 ・友達や地域の人と関わったり自分自身を振り返ったりすることや、道徳におけるふるさと教材を使った学習、日常的な実践などからも、ふるさとを好きになってほしいということを願っている。
	③<道徳・人権教育の推進> 道徳の重点項目(友情・信頼、よりよい学校生活、集団生活の充実)を中心に道徳の時間を充実させる。また、豊かな体験を活かし、教育活動全体を通して心に響く道徳教育を推進する。	【児童⑩87%】【教職員⑨92%】 道徳掲示板は、全学年に、児童の考えが深まった題材の授業の板書や児童の振り返りを掲示してもらった。また、掲示する題材は、できかぎり重点項目の題材にした。掲示板を見ることで、職員同士で道徳の授業について学び合うことができた。児童も他の児童の振り返りから学んだりすることができた。	B	B	3学期は、2学期よりも6年生を送る会や卒業式など、行事と関連づけた題材を行事の前後に意識して各担任が選び、授業をすることで、教育活動全体を通して心に響く道徳教育を推進する。	
4 体(健やかな 身体 の 育成)	①<基礎体力づくりと体力の向上> 体育の授業の充実と1校1プランに基づく体力づくりを行い、児童が目標を持ち、粘り強く頑張る、運動に親しめるようにする。	【児童⑨90%】【教職員⑩100%】 運動会練習にICT機器を使うことで、児童が休み時間などに進んでダンスなどの練習に取り組む姿が見られた。また、児童が運動会の目標を立てることで、その目標に向かって努力することができた。 持久走では、長休みに持久走練習の時間を設定することで、児童が持久力を高める運動に取り組むことができた。しかし、取り組みに対する積極性に差があるように感じた。今後、運動が苦手な児童も主体的に運動に参加できるようにする必要がある。	B	A	・なわとびの間では、意欲付けとして掲示物を作り、児童が自分の目標に向かって進んでなわとびに取り組めるようにする。また、体育委員会からの紹介動画を作成し、できるようになりたい技などを具体的に紹介する。 ・スポチャレいしかわ「40m走」にも進んで参加していきたい。学級ごとに目標を設定させ、その目標に向かって練習に取り組めるように、スポチャレ大会を開催する。また、スポチャレ大会では、異学年交流をすることで、来年度への意欲にもつなげていく。	・新型コロナウイルスの発生・流行により、様々な活動が制限され、残念であった。運動面でもこれまでのように、十分体を動かすことができず、体力面でも低下があったのではないかと考えられる。
	②<健康生活の推進と安全指導の徹底> 感染症対策・熱中症対策等の指導を通して、自ら健康や命を守る判断力を育てる。	【児童⑬92%】【教職員⑪92%】 1学期同様、「活動の前後には手洗いと消毒すること」を注意喚起してきた。冬休みの前には、感染症予防と体調管理について指導を行った。マスク生活3年目に入り、気持ちも緩んでいるところも見られたので、手洗いと消毒に関しては、保健体育部で呼びかけを行ってきた。	A	A	コロナウイルスとインフルエンザの感染が広がっていることを受け、引き続き手洗いと消毒の注意喚起を保健体育部で行っていききたい。基礎疾患があるなど、個人的にマスクを外すことに抵抗のある児童もいるので、教職員が共通理解を図り、児童間で同調圧力が生じないように注意を払う必要がある。	・体を動かすことへの意識や子どもの体力については、今後どのように伸ばしていくか課題となる。
	③<メディアコントロール力の育成> 児童が健康や生活に関心を持ち、主体的によりよい生活習慣・食習慣づくりを推進する。また、地域・保護者と連携して、メディアコントロール力の育成を図る。	【児童⑯77%】【保護者⑪82.9%】 中学年は「e-ネットキャラバン」によるオンデマンド授業を視聴することで、ネットとの付き合い方についての学習を行った。真剣に視聴する姿が見られた。低学年からメディア使用の学習をすることで、自分自身のメディアの使用について振り返る機会となり、今後のよりよいメディア使用の定着を図れると考える。保護者による生活リズムを整えるための取組の割合が増えているのに対し、高学年になるほど、生活リズムを主体的に取り組もうとする割合が低下している状況にある。	B	B	・今後は家庭でのメディアの使用についての見直しだけでなく、クロムブックの使用も含めたメディアコントロールが必要となってくる。家庭との連携に加えて、児童本人が生活リズムを改善する意欲につながるような取組を「福岡小メディアコントロールデー」に合わせて実践したい。 ・デジタルシチズンシップ教育の視点を児童・保護者と共有する。 ・家庭でのメディアの使用については、今後も継続して実態把握を行い、PTA活動と連携した取組を行う。	・スポチャレに、全校で取り組み、異学年での交流を行うことができたのはとてもよかった。子どもたちの成長にもつながる。
5 家庭・ 地域との 連携	①<保護者・PTAとの連携による社会性の育成> 保護者と連携して、PTA活動の活性化と児童の社会性の育成を図る。また、児童・保護者が参画意識を持って、あいさつ等、社会性の育成に取り組めるよう努める。	【児童⑳79%】【保護者⑫72.6%⑯86.7%】 児童の挨拶については、アンケートでは4ポイント低下したが、登校時や能美市あいさつデーなど、児童会、保護者の方、教職員が進んで挨拶や声かけをし、元気に明るいあいさつができる児童が増えたように実感している。PTAについては、長期にわたるコロナ禍により、PTA活動・町内の活動などはコロナ禍以前のように行うことができない状況にある。それでも運動会・持久走の会、奉仕作業などを行うことで、PTAの専門委員会の活動なども開催することができた。	B	B	・今後も「明るいあいさつ」を通して、児童の社会性を育てるとともに、児童、保護者、地域との関わりをもち、地域の宝として、また地域を活性化させる役割をもつことにも気づかせながら、声をかけたりほめたりしていきたい。 ・感染防止対策を講じながら、「6年生を送る会」「卒業式」などの学校行事を計画し、保護者の皆様と協力・連携していきたい。今後もお便りやホームページ等を利用して、児童の様子を保護者に伝え、関心を促していく。また、PTA活動の活性化を図るため、来年度への引き継ぎをしっかりと行い、PTA活動への参画意識を高めていきたいと考えている。	・あいさつに関するアンケートではあまり、良好とはいえないが、地域の方へのあいさつは以前より多くなったと実感している。とてもうれしく思っている。
	②<コミュニティスクール事業の推進> 学校と地域が協働し、子どもを地域で支え育むため、学校運営協議会を充実させ、地域の人材が積極的に学校運営に参画できるコミュニティスクールを推進する。 家庭・地域のニーズを把握し、「開かれた学校」として地域や保護者に信頼される学校づくりを進める。	【児童㉑85%】【教職員⑬92%】 地域の先生との学習で、知る楽しさを感じたり、学びが深まったりしていると感じる児童の割合は前回と同程度の85%であった。依然として、コロナ禍における活動では地域の方々との関わりは、規模が縮小されている。 クラブ活動、読み聞かせ、昔遊び、家庭科の調理実習、裁縫などで地域の方に参加していただき、教職員は感謝の気持ちをもち、地域の方とのコミュニケーションを図ることができた。	B	B	・2学期より玄関での検温チェックがなくなり、児童は地域の方と接する機会が減ったが、学習への様々な支援や読み聞かせ、行事の見守りなど地域の方に支えられていることが多い。学校運営協議会や町内会長会においては、児童や学校教育に対し、ご協力ご理解をいただいている。今後も地域の方とのつながりを大切に、「福岡っ子」を育成していくよう努める。 ・「学校運営協議会」については、長期にわたり支援していただいているが、PTAへの周知や参加を含め、情報発信したり、連絡を密にしたりしながら、学校と地域がともに連携して、児童の成長を見守っていく。	・コロナ禍で当たり前ではなくなった生活が6年生に現れており、取り戻すには時間がかかりそうである。子どもの心の部分を見守っていくことがCSの役割だと考える。「子どもは地域の宝」という思いが、CS事業の継続のためには大切である。